

# 東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	第44回東邦大学医療センター大橋病院外科集談会(第12回東邦医学会大橋病院外科分科会)
作成者(著者)	東邦大学医学会編集委員会
公開者	東邦大学医学会
発行日	2023.06.01
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 70(2). p.65 68.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	学会抄録(分科会)
著者版フラグ	publisher
メタデータのURL	<a href="https://mylibrary.toho-u.ac.jp/webopac/TD47338018">https://mylibrary.toho-u.ac.jp/webopac/TD47338018</a>

## 第44回東邦大学医療センター大橋病院外科集談会 (第12回東邦医学会大橋病院外科分科会)

令和5年1月14日（土）

東邦大学医療センター大橋病院 臨床講堂

開会の辞 齊田芳久

### セッション1

座長：二渡信江

#### 1. 巨大肝嚢胞に対して ICG 蛍光法を用いた腹腔鏡下肝嚢胞開窓術を施行した一例

中村 岳, 渡邊隆太郎, 浅井浩司  
森山穂高, 鯨岡 学, 重田健太, 渡邊 学

【緒言】今回、われわれは巨大肝嚢胞に対して、ICG 蛍光法を用いた腹腔鏡下肝嚢胞開窓術を施行した一例を経験したので報告する。【症例】症例は50歳代の男性。2年前に腹部圧迫感を主訴に当院救急外来を受診した。腹部CT検査にて、肝右葉に径23cm大の巨大肝嚢胞を認めた。治療方針に関して相談した結果、保存的治療を希望したため、消化器内科にて経皮的肝嚢胞ドレナージとミノサイクリンを用いた焼却術を計4回施行されていた。今回、再度腹部症状が再燃し、手術を希望され当科受診となった。これまでと同様に肝右葉に径20cmを超える巨大肝嚢胞を認めた。この肝嚢胞に対して腹腔鏡下肝嚢胞開窓術を施行した。手術に際しては、肝嚢胞の表面を走向する胆管損傷を回避する目的でICG 蛍光法を併用し手術を行った。手術開始約2時間前にICGを25mg静注し、術中にICG 蛍光を認めた部位に関してはクリッピングも併用し開窓術を完遂した。術後胆汁漏は合併せず、第5病日に退院となった。【結語】ICG 蛍光法を用いることで、巨大肝嚢胞に対し安全な腹腔鏡下開窓術を施行できる可能性が示唆された。

#### 2. 肝右葉切除後に発症した横隔膜ヘルニア嵌頓に対し、腹腔鏡下ヘルニア修復術施行した1例

佐藤二郎（東邦大学医療センター大橋病院 外科）  
太田義人, 斎藤 奏, 碓井麻美  
須ノ内康太, 西森孝典, 黒田浩明, 篠原靖志  
坂本昭雄（地方独立行政法人 さんむ医療センター 外科）

症例は65歳男性で17ヶ月前に肝細胞癌に対して肝右葉切除施行した。今回、腹部膨満感、嘔吐を主訴に救急外来受診した。腹部CTでは、右側結腸が右胸腔内に脱出し、口側結腸と小腸の拡張を認め、右横隔膜ヘルニア嵌頓と診断した。バイタルサインは安定しており、腸管虚血を疑う所見を認めなかったため、イレウス管留置による保存的加療を行い、減圧後に腹腔鏡下ヘルニア修復術を施行した。嵌頓している結腸を腹腔内に還納し、横隔膜を非吸収糸で縫合閉鎖し、メッシュを用いて補強した。術後経過は良好で術後8日目に退院した。今回我々は肝切除後に発症した横隔膜ヘルニアの1例を経験したので若干の文献的考察を加え報告する。

#### 3. 乳癌多発骨転移に対して CDK4/6 阻害剤治療が有用であった症例

佐々木彩, 長田拓哉, 岡本 康, 岡 由希

【背景】乳癌骨転移は比較的良好に見られるが、椎骨への多発骨転移を来たすと体動時痛が増悪しADLが著しく損なわれる。今回我々は多発骨転移により歩行困難となった症例にCDK4/6阻害剤が有用であった2例を経験したのでその治療経過について報告する。【症例】1) 58歳女性。20XX年6月、強い腰痛により歩行困難となり精査の結果、乳癌多発骨転移の診断となった。骨転移に対する放射線治療後、ランマーク、フェソロデックス、アリミデックスを開始し、

麻薬を併用したが症状の改善乏しく、ページニオを使用したところ症状が軽快し歩行可能となった。2) 58歳女性。20XX年8月、右股関節痛および背部痛にて歩行困難となった。以前から右乳房のしこりを自覚しており、精査の結果、右乳癌多発骨転移の診断となった。骨転移に対する放射線治療後、フェンロデックスとアリミデックスを開始したが効果に乏しくページニオ開始し症状改善傾向となった。【考察】乳癌多臓器転移に対する手術適応は乏しく、ホルモン剤や抗癌剤を中心とした治療が行われる。しかし、骨転移単独ではLife-Threateningとは言い難く、長期に渡る治療法について苦慮される場合も多い。近年CDK4/6阻害剤はホルモン陽性、HER2陰性、進行再発乳癌に対する治療法としてその重要性が認められるようになった。本症例では乳癌多発骨転移に対するCDK4/6阻害剤の有用性が示された。【結語】乳癌多発骨転移によりADLが著しく損なわれた症例に対してCDK4/6阻害剤を使用し症状の改善を認めた。

#### 4. ERPにて主膵管損傷の診断をし、膵頭十二指腸切除術を施行した小児IIIb型外傷性膵損傷の1例

井上正章, 浅井浩司, 渡邊隆太郎  
重田健太, 森山穂高, 萩原令彦

症例は16歳男児。バスケットボールの試合中、空中でバランスを崩し腹部から床に落下して受傷した。造影CT検査で膵体部の断裂を認めた。同日緊急で内視鏡的逆行性膵管造影検査(Endoscopic Retrograde Pancreatography: ERP)を行い主膵管の断裂および造影剤の漏出を認めたことから、日本外傷学会臓器損傷分類IIIb型膵損傷と診断した。ERPで膵体尾部へカニューレーションを試みるも困難であった。採血データと腹部所見から準緊急での手術適応と判断し、翌日に膵頭十二指腸切除術を施行した。術後リンパ瘻を認めたが、その後の経過は良好で第34病日に退院となった。小児の腹部外傷において膵損傷の頻度は低く、特にIIIb型膵損傷は稀である。受傷機転や受傷からの時間経過により多彩な病態を呈することが多く、手術療法の他に内視鏡的治療を含む保存的治療が奏功した報告例も散見され、標準的治療が確立されていない。今回我々は腹部鈍的外傷後に膵頭十二指腸切除術を施行した小児IIIb型膵損傷の1例を経験したので、文献的考察を加えて報告する。

#### 5. 腹腔鏡下胆嚢摘出術後に診断された偶発胆嚢癌の検討

渡邊隆太郎, 浅井浩司  
森山穂高, 鯨岡 学, 渡邊 学

腹腔鏡下胆嚢摘出術(LC)は、胆嚢ポリープや胆石症に対する一般的な治療法として用いられている。しかしなが

ら、これらの良性疾患に対してLCを施行した症例では、まれに偶発的に胆嚢癌の診断が下されることがある。偶発胆嚢癌(iGBC)とは、術前および術中に悪性腫瘍を疑うことなく、病理組織検査でのみ検出された悪性腫瘍と定義される。多くは残存病変を有し、根治術を指標とした手術と比較して生存率が悪くなる可能性があるため、胆嚢癌の術前診断が重要となる。本研究では、当院にて2013年1月から2022年10月までの期間に胆嚢摘出術を施行した1972例を後方視的に解析した。偶発胆嚢癌の症例は21例に認め、平均年齢は68歳であった。うち9例が緊急手術を施行しており、7例で術中の胆汁漏出を認めた。また、追加切除は5例に施行され、術後補助化学療法は8例に施行された。胆嚢全摘を施行した群においては有意にOSとRFSが短縮したが、穿刺ドレナージの有無は影響を与えなかった。iGBCにおいて、初回手術中の胆汁漏出の予防は再発率の低下に繋がる可能性が示唆された。腹腔鏡下手術の普及により偶発胆嚢癌の症例は増加しており、今後さらなる症例の集積による最適な治療指針の確立が望まれる。

## セッション2

座長：岡本 康

### 1. 横浜総合病院外科での勤務状況報告

橋本瑤子

横浜総合病院は神奈川県横浜市青葉区にあり、横浜北部地区に位置する病床数300床の中規模の総合病院である。消化器センター外科部門の改変に伴い、2021年4月より当医局より外科医が派遣されることとなり、初年度に引き続き2022年も自身が継続して派遣されている。消化器センターは外科が5人、内科が4人で構成され、カンファレンスは合同で行い、症例の検討や治療の依頼・患者情報の共有を行っている。基本的に主治医制で、担当患者を外来・入院・手術を通しシームレスに担当していく。自身の業務として外来は半日×2コマを担当し、手術は月・水・金の週3日施行している。2022年の全体の手術症例及び自身の術者症例を供覧する。また、学会参加も2022年には3学会で発表する機会を得ることができた。大学病院とは異なる環境での経験を積むことで得られた経験をもとに、今後の実臨床や後進の指導に邁進したい。

### 2. 虎の門病院 呼吸器センター外科での研修に関して

新妻 徹

虎の門病院は昭和33年に設立され、2019年5月に新病院を開設した、819床、38診療科を有する総合病院である。

2021年10月1日より虎の門病院呼吸器センター外科で研修をさせて頂いている。手術はほぼ全例3-port VATSで行われ、手術対象症例は、肺悪性腫瘍に限らず、気胸、膿胸等の炎症性疾患、縦隔腫瘍、胸壁腫瘍等、多岐にわたる。2022年1月から2022年12月末までの1年間の手術症例数は約420例となる予定である。虎の門病院で施行されるVATSは、3-port VATS、4-port VATS、uniportal VATSと様々な胸腔鏡下手術が各施設で行われている中で、「虎の門式」と広く認知される手術方法である。30度斜視鏡を用いた対面倒立法で行われ、術者は患者の右側に立ち、胸腔内操作においても定型化された手術が行われる。第1助手がスコピスト、第2助手が主に胸腔外の部分の助手となるため、胸腔内操作のほぼ全てを術者自身のみで施行しなければならないため高い技術が求められる。それと同時に手術の安全性も非常に意識しており、スコピストの視野出しの技術も求められる。術者およびスコピストとしての技術、思考を日々ご教示頂いている。また膨大な手術件数をこなす中、学会発表や他病院との合同研究会等も積極的に進んでおり、その機会を与えて頂いている。2021年10月1日から現在に至るまでの研修内容に関して報告する。

### 3. 国立病院機構東埼玉病院呼吸器外科 2022

西牟田浩伸

国立病院機構東埼玉病院はもともと神経内科・呼吸器内科・リハビリテーション科が主な診療科の病院である。呼吸器外科は平成17年に開設された。一時は年間手術症例100件を超え、呼吸器外科常勤医4人と豊富な人材を誇った時期もあったが、前呼吸器外科部長の定年退職を機に徐々に常勤医が退職。手術ができない状況となったため、令和元年4月より大橋病院外科から非常勤医として診療にかかわってきており、令和3年4月より常勤医として着任した。当院に外勤で来ていただいている桐林先生・伊藤先生の協力もあり、手術を再開。令和3年は外科学科NCD症例登録数61例であり、外科学会専門医制度関連施設要件を達成した。当院を取り巻く医療状況とともに令和4年の実績・今後の展望について発表させていただく。

## セッション3

座長：浅井浩司

### 1. 外科領域急性腹部感染症における FilmArray の有用性の検証およびメタゲノム解析

柿崎奈々子，浅井浩司，鯨岡 学  
森山穂高，渡邊隆太郎，渡邊 学  
(東邦大学医療センター大橋病院 外科)  
黒田 誠  
(国立感染症研究所病原体ゲノム解析研究センター)

【はじめに】穿孔性腹膜炎や腹腔内膿瘍など外科領域急性腹部感染症は致命的となり得るため、迅速起炎菌同定システムの構築は急務とされてきた。われわれは外科領域急性腹部感染症の膿汁・腹水を対象に、FilmArray を使用し評価を行ってきた。今回、メタゲノム解析により FilmArray の有用性を検証し、同時に各検体を網羅的に評価した。【対象】2019年4月から同年12月までに当科で経験した外科領域急性腹部感染症11例を対象とした。採取された検体を FilmArray およびメタゲノム解析にて評価を行った。【結果】FilmArray・血液パネルでは、培養にて同定された病原体のうち90.4%が検出可能であった。メタゲノム解析では多彩な病原体が示され、炎症の強い検体ではより多くのヒトゲノムが検出された。FilmArray はメタゲノム解析で示された多種・多数の遺伝子が存在する中でも高率に起炎菌の同定が可能であることが示された。【結語】本研究では少数例の解析であるが、メタゲノム解析により FilmArray の有用性が示された。

### 2. 胃癌における Helicobacter pylori 感染と癌/精巢抗原 KK-LC-1 の発現についての関連性

前原惇治，二渡信江，秋元佑介  
(東邦大学医療センター大橋病院 外科)  
堀江義政，日原大輔  
(東邦大学医療センター大橋病院 消化器内科)  
横内 幸，高橋 啓  
(東邦大学医療センター大橋病院 病理診断科)  
福山 隆  
(北里大学メディカルセンター 研究センター)

【背景】癌/精巢抗原は、正常組織では精巣に限局して発現しており、また、全ての種類の組織癌である程度の頻度で発現していることが知られている。Kita-kyushu lung cancer antigen-1 (KK-LC-1) は肺癌より発見された癌/精巢抗原である。KK-LC-1 の発現頻度は胃癌では82%と高率に発現し、早期癌でも79%で発現していると報告されてい

る。また胃癌患者は、H. pylori 感染が高頻度で、H. pylori がKK-LC-1の発現を誘導している可能性がある。本研究では、KK-LC-1陽性胃癌の特徴について検討した。【方法】当院で2020年9月から2022年9月までに胃癌の治療を行った症例のうち、同時性胃癌の発生がない、同意の得られた61例を対象とした（内視鏡治療34例、外科治療27例）。ホルマリン固定パラフィンブロックの切片に抗KK-LC-1モノクローナル抗体：Krab34B3を用いて免疫染色を行い、KK-LC-1発現の有無を調査した。癌部、非癌部でのKK-LC-1発現の有無と、H. pylori感染との関係を調べ、KK-LC-1陽性胃癌の特徴を検討した。【結果】癌部でのKK-LC-1陽性数は41例（67.2%）で、非癌部でのKK-LC-1陽性数は2例（3.3%）であった。血中抗H. pylori抗体陽性率は31.0%であり、H. pylori感染歴のある割合は69.0%、内視鏡的にC-2以上の萎縮の有無が確認できた症例は93.0%であった。KK-LC-1陽性胃癌とKK-LC-1陰性胃癌の臨床病理学的因子を比較検討したが、組織型や深達度、脈管侵襲、腫瘍径、治療法、再発の有無などに有意差は認めなかった。血中H. pylori抗体においても有意差は認めなかった。H. pylori除菌歴を有する症例でKK-LC-1発現が有意に多かった。【結論】胃癌におけるKK-LC-1発現は67.2%にみられ、以前の報告より少なかったが、小さな早期癌からでも発現していた。今回の検討では、KK-LC-1発現とH. pylori感染との関連ははっきりしなかった。除菌症例でKK-LC-1発現が高く、除菌後胃癌の発見に役立つマーカーになる可能性があった。今後さらに症例を蓄積し検討していく予定である。

### 3. 肺癌における癌/精巢抗原（KK-LC-1）の発現とH. pylori感染の関連性

秋元佑介，二渡信江，前原惇治  
（東邦大学医療センター大橋病院 外科）  
横内 幸，高橋 啓  
（東邦大学医療センター大橋病院病理診断科）

目的：H. pylori感染は、胃癌の発生に関与しているが、胃以外の疾患に関与している可能性が示唆されている。癌精巢抗原は、さまざまな癌組織や精巢の生殖系細胞前駆体

に発現し、成人正常体細胞には発現していない抗原の総称である。Kita-kyushu lung cancer antigen-1（KK-LC-1）は肺癌細胞より同定された癌精巢抗原で、胃癌でH. pylori感染がKK-LC-1の発現を誘導している可能性が示唆されたため、肺癌症例でH. pylori感染とKK-LC-1発現を調査し、H. pylori感染が肺癌の発生に関与しているかを検討した。方法：2020年4月から2022年3月に当科で行われた肺癌手術症例23例を対象とした。H. pylori感染は術前の血液で抗H. pylori抗体を測定した。KK-LC-1発現については、ホルマリン固定パラフィンブロックの切片に抗KK-LC-1モノクローナル抗体：Krab34B3を用いて免疫染色で発現の有無を調査した。KK-LC-1発現陽性例と陰性例で臨床病理学的因子（性別、年齢、H. pylori抗体、ステージ、リンパ節転移、組織型）について比較検討した。さらにH. pylori抗体陽性例と陰性例でも臨床病理学的に比較検討した。成績：KK-LC-1は10例（43%）に発現していた。KK-LC-1陽性例ではH. pylori抗体陽性は2例、陰性は8例で、KK-LC-1発現とH. pylori感染に関連性は認めなかった。KK-LC-1発現陽性例と陰性例では、臨床病理学的因子で有意差を認めなかった。また、H. pylori感染の有無で臨床病理学的因子に有意差は認められなかった。結論：本研究では、肺癌とKK-LC-1発現、H. pylori感染に関連性は認められなかった。しかし23例と症例数も少ないため、詳細な検討が不十分と考える。今後症例を増やしてさらに検討していきたい。

## 業績発表

## 特別講演

座長：齊田芳久

「内視鏡外科の次世代への継承～心・技・体～」

内藤 剛先生

北里大学医学部 下部消化管外科学 主任教授

閉会の辞 渡邊 学